The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はしがき
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54349
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はしがき

本プロジェクトは『批判的社会言語学の諸相』(2002 年度)、『批判的社会言語学の可能性』(2003 年度)、『批判的社会言語学の射程』(2004 年度)、『批判的社会言語学の展開』(2006 年度)、『批判的社会言語学の課題』(2007 年度)、『批判的社会言語学の実践』(2008 年度)、『批判的社会言語学の展開』(2009 年度)、『批判的社会言語学の領域』(2010 年度)、『批判的社会言語学の方法』(2011 年度)、『批判的社会言語学の構築』(2012 年度)、『批判的社会言語学の展望』(2013 年度) の延長線上にある。また、この間刊行した『「正しさ」への問いー批判的社会言語学の試み』(野呂香代子・山下仁、三元社、2001、新装版 2009 年)、『「共生」の内実ー批判的社会言語学からの問いかけ』(植田晃次・山下仁、三元社、2006、新装版 2011 年)、そして、今春刊行した『ことばの「やさしさ」とは何かー批判的社会言語学からのアプローチ』(義永美央子・山下仁、三元社、2015 年) とも深い関連を持つ。さらに、2012 年度から全学的に開始され、山下が運営統括委員、植田がプログラム担当者に名を連ねている「未来共生リーディングプログラム」とも関連を持つものである。

2002 年に開始された本プロジェクトの出帆より 10 余年の歳月が流れた。この間、14 人が 42 本の論文・翻訳によって、上掲のように「批判的社会言語学」の「諸相」・「可能性」・「射程」・「展開」・「課題」・「実践」・「領域」・「方法」・「構築」・「展望」に取り組み、今年度は「軌跡」をテーマとした。

昨年度のプロジェクトの「はしがき」では、「太郎の絵」という文を例に、格助詞「の」が主体・客体・所有などさまざまな文法的機能を持つことに言及し、「いま一度、「の」の機能の多様性を念頭において、広い視野で批判的社会言語学とは何か、それが為し得ることは何かを続けて考えて行きたい。」と書いた。

プロジェクトの申請用紙では、概要について、「今年度は、社会的・政治的・文化的変動による世界秩序の再編・再構築に伴う新たな事象が常態化しつつある現状を視野に入れ、批判的社会言語学の過去・現在・未来をつなぐ軌跡を考察することを試みる。」と書かれている。

このような心意気の下、今年度も日本を含む諸地域の事象を取り上げ、具体的な検討を行った。

山下論文では、社会言語学の観点からドイツのメンタリティーの諸相について考察することを目的とした。まず、日本におけるドイツ語の地位について簡単に説明し、次に日常生活におけるコミュニケーション上の価値について述べ、ある場面において適切な、もしくは丁寧な言語表現がいかなるもの であるかという問題に触れた後、丁寧さや親しさがドイツのメンタリティーと言えるかどうかについて考える。その後、福島における原発事故のあと、ドイツが原発の廃止を決定することができたことを踏まえ、日本人がドイツ人から学ぶことができるのは、批判的思考や自己批判の契機であることを示す。

小川論文では、ルクセンブルクにおける移民の増加とドイツ語による識字教育の今後の改革について、言語的な人権と結びつけて考察した。まず、ヨーロッパ内でルクセンブル

クと同様に複数の言語で識字が行われている地域、すなわちフランス語とイタリア語で識字を行うイタリアのアオスタ、ドイツ語、イタリア語、ラディン語で識字を行うイタリアのラディン語地域の2つの地域について、その歴史的経緯や現在行われている複数言語同時の識字の現状を記述した。その上で、現在のルクセンブルクの識字教育の問題点を挙げ、そのために上記の2地域の例がどのような示唆をするのかを、他の提案されている解決策の例と比較検討しながら考察した。

植田論文では、大韓民国の言語景観を取り上げ、ソウル特別市の鉄道路線図に見られる駅名表示の日本語表示を例に、そこに見られる問題点の考察を試みた。さらには、多言語表示がどのような「正確さ」のレベルで作成されるのかという点を手掛かりに、それが「何のために設置されるのか？」について、「わかりやすく有用な表示」という観点から基礎的な検討を試みた。その結果、実のところ、利用者の便宜より「イメージ言語」としての役割が優先されているのではないかという点を指摘した。

中島論文では、聞こえない・聞こえにくい身体を持つろう児のリテラシーについて考察した。ろう教育において、日本語の読み書き指導は、手話や口話という教育方法の違いにかかわらず常に重要視されてきた。ろう児に対するリテラシー教育とは、語彙や文法など日本語の機能性を高める「機能的リテラシー」に始まり、2000年前後からは、批判的・内省的に読む力を含めた「批判的リテラシー」を含むようになってきている。しかし、最終的には今ある日本語を習得するためのリテラシー教育であり、日本語そのものへの視点を欠いていることを指摘した。

読者の皆様からの忌憚なきご意見、ご批判などをお伝えいただけたら幸いです。

執筆者一同